

ボランティア活動に参加して（原文のママ）

チャン トウ チャン（貿易大→東京外大留学）



4月15日にベトナムから日本に来ました。つまり、大災害があった時、ベトナムにいました。毎日テレビやネットで日本のニュースを見たり聞いたりしました。心が痛んだし、とても心配だし、深く同情申し上げました。

貿易大学の日本語クラブの皆が何をして、日本に応援するかと考えました。貿易大学の学生ができるだけ祈りを書いて、千羽鶴を折りました。“日

本はいつも私達の心の中にいます。日本がんばろう。”“これからその震災が来ないようにお祈り申し上げます。”それは私達の本当の感じや希望です。

私はテレビでも授業でもいろいろなこと聞きましたが、今日こちらに行かせていただいて、現実をみます。。。。。。多くの被害を受けて、困りましたけれども、皆さんがだんだん普通生活を送って、立派な日本人だと思っています。私は本当に感嘆しています。それから、皆さんがあらゆる困難にぜひ打ち勝たれるのを信じます。私達いつも応援します。

ブイ ティ トウイ ハン（貿易大→東京外大留学）



私はバスの窓から沢山のがれきを見ました。ベトナムにも、天災はありますが、これ程までに破壊された状況は初めて見ました。テレビで何度も見ましたが、実際に見ると印象がだいぶ違います。今回のボランティア活動で、私はいろいろな貴重な体験をしました。皆様の連帯と強い精神力を感じました。たとえ生活が苦しくても、おじいさん、おばあさん、子供達が笑顔でした。たぶん普通の生

活まで長い時間がかかるでしょう。しかし皆さんは頑張っています。そんな努力に本当に感服します。

コンサートの時、とても暑かったのに、皆さんが聴きにきてくださって、私はとても感謝しました。私達が帰るときに、バスの近くまで見送って、ずっと手を振ってくださった方がいました。私はとても感動しました。

私は、皆さんのために少ししか助けることが出来ませんでした。アジアの新しい風のメンバーとして、小さな貢献が出来て、嬉しかったです。私はいつも皆さんの平安をお祈りしています。

王锡钺（清華大→早稲田大学留学）



最初バスで被災地現場に着いたところに、「三ヶ月経ってもこれか」と衝撃を受けました。「世界で一番の日本の自動車もぐしゃぐしゃになっていて、こんな大自然の前で自分がなにかできるのか、むしろ何もできないじゃないかな」というふうに考えていたのです。

そして安渡小学校で掃除したり被災者と交流したりしていて、色々人生の知恵も聞かせていただいたりコンサートで美しい音楽も楽しんだりしていて、充実な二日間を

過ごすことができたと言えるのでしょうか。「人間はこういうものじゃない。自然と戦ったり、自分を反省したりして、戦っては反省して、反省しては戦ってという生活を続けてきたんじゃないかな」というふうに帰り道で考え直したのです。人間、自分自身の持っている力を小さくしちゃダメです。こう考えると、本当に頑張らなければならないのは私たちではないのでしょうか。「頑張る」と現地の被災者に言うとしての立場も資格もない私は、深夜一人で夜空を見上げながら「今どうなっているのかな」と想像していて、一つ一つの顔を思い浮かべるだけなのです。

Please live a better life.

何芳（北京二外→慶應大学大学院留学）



6月4日～5日、大槌町に行ってきた。震災からそろそろ3ヶ月経ったが、津波の被害を受けたところは、がれきがいっぱい残っていて、魚臭い匂いは漂っていた。警察は行方不明者の捜査を続けていた。

大槌町から戻ってきてそろそろ1ヶ月が経つ。被災地のニュースを見るたびに、私はその匂いを思い出し、被災地で会った人々の顔を頭に浮かぶ

のである。最近、週末の渋谷の賑やかさや夜の電車で酔っぱらって騒いでいる人たちを見て、東京は元気を取り戻したなと思った。被災地は東京にいる私たちにとって、やはり遠い存在である。余震が続いていた日々も嘘のように感じた。被災地の人々の苦しみに同感しないわけでもないが、いつまでも苦しみを抱えているだけでは、前へ進まない。東日本大震災は、神戸淡路大震災と比べ再建が遅れていると言われている。助けたい、立ち上がりたいという気持ちを行動に、被災地にも速く元気を取り戻してほしい。

区敏芝（清華大→早稲田大学留学）



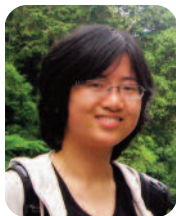
2日間の被災地ボランティア活動は本当に速く終わってしまったと感じる。参加する前は、「日本の皆様にお世話になったから、微力でも被災地の復興を手伝って、恩を返したい」と思ったんだけど、結局にかえって被災地の皆様に前向きな力をもらった。

家も車も家族も津波に流されてしまったが、余儀なく避難生活を送っているが、彼らはあきらめずに頑張っている。トイレはいつもきれいで、ルールをきちんと守って、ボラン

ティアの人によく「ありがとう」と言って、帰る時見送ってくれた。また、現地で彼らの笑顔を見て、私は「これは最高の笑顔、東北人の負けん気のDNAが流される笑顔」と思った。実は、ボランティアの前、自分は小さいな困難に悩んでいた。被災地皆様の姿を見た後、「自分はこのままだと、だめだ。前向きになくちゃ」と分かってきた。

「被災地の皆様、前向きな力を与えてくれて、ありがとうございます。被災地は一刻もはやく復旧できるよう、私たち留学生は頑張っていきたいと思います。」と私はまた被災地に行き、彼らに言いたい。

周皓昕（清華大→京都大学留学）



今度のボランティア活動で、私は避難所の安渡小学校校舎の掃除をしました。片付けているところ、校舎の清潔さに驚きました。玄関などには工事のため埃が積もったが、屋内ではかなりきれいで整っています。そのうえ、避難者と交流するとき、お見舞いしようとする私たち留学生は、逆に奢られたり励まされたりして、おばあさんたちのお世話になりました。その優しさに感動している

と同時、ここの方々は各自、津波がもたらした痛みがあるのだろうかと考えて言葉を失いました。

被災地の光景に心を揺り動かされました。大槌町の海岸で、廃墟となった民家と散乱している靴はあの日のことを語っているように感じました。

この二日間は忘れない思いがいっぱいです。ボランティア参加者の自分のほうがいろいろと感謝すべきだと思います。安らぎに戻ったきれいな海のように、ヤスおばあさんや三浦さんたちの生活が早く元にもどるよう願っています。

ボランティア活動に参加して（原文のママ）

張馨心（清華大→キャンノン（株）インターン生）



東北地震が起きた時、インターンで仕事中の私はその時、怖かった体験をしました。その後、被災地の方はどうだろうとずっと心配しています。アジ風のお陰で、大槌町へボランティア活動しに行きました。

行く前、被災程度の重さを知っていたが、大槌に行く道中で、見渡す限りの廃墟で驚きました。自然の残酷さは想像以上でした。

私は同行の皆さんに感動されました。皆さんは同じ気持ちを持

って行ったのでしょうか。被災地に自分ができていることをやりたい気持ちを持って、被災地の方に少しでも慰問できれば、うれしいです。

被災地の方にも感動されました。皆さんは樂觀で毎日を過ごして、生活はどんどん良くなると信じていることが分かりました。早めに回復すると心よりお祈りします！

二日のボランティア活動を通じて、私もいろいろ勉強になりました。被災者を慰問するために行ったが、かえって、励まされて勇気が出ました。

被災地の皆さん、アジ風の皆さん、ありがとうございました。

張静（北京師範大学大学院→大阪大学国際交流プログラム参加）



まず、被災地の怖さに驚いた。私は残りがれきを除去した時、見たものは殆んどクズの状態になった。空気には生臭いの匂いがいっぱい瀰漫した。あちこちはハエが飛んだ。海の前に立っている私は人間の弱さを痛感した。

次に、安渡小学校避難所で暮らしている人々の強さを感心した。私と交流した小国夫婦がもう80代の人間ですが、まだ元気いっぱい良かった。

おばあちゃんは地震後日常生活の面白いエピソードと自分の悟りを私達に語った。避難所から別れる時、小国夫婦と他の老人達は私達を送る時、彼らの姿を見てこらえきれずに涙を流した。

震災後三ヶ月が経った被災地はまだ廃墟の状態、再建の人員も少ないが感じます。これは日本の国家体制に関する問題かもしれませんが、私は少し残念が感じます。ただ二日間のボランティア活動ですが、色々なことを経験した。笑顔もしたり、涙も流れたり、人生は喜びも悲しみも溢れています。被災地が一日も早く再建になられるようお祈り申し上げます。

楊絮（清華大→キャンノン（株）インターン生）



二日間の被災地ボランティア活動は終わりました。感想を申し上げますと、やはり自分の目で実際に見ることは違うのだ、ということです。写真で写すには限界があるし、音や臭いまでは伝えることはできない。それに直接見て印象深かったものは目に焼きつきます。また、人間というものは自然の前では無力な存在だと思われました。ボランティアが終わって帰るとき、あるおばあさ

んが私たちに「お疲れ様。本当にありがとう。」と言ってくれました。私達も被災地のために役に立ったんだなと思い、本当にうれしくて、泣きそうになりました。困っている人たちを少しでも助けられて、よかったです。私にとって初めての本格的なボランティア活動でしたが、ボランティアとは愛を実践する場であると思います。被災地の住民の方々が早く元気を出してくれるように願っています。

最後に、このような貴重な機会を作って下さったアジ風の皆様には心から感謝しています。

崔振宇（北京二外→神戸大学大学院留学）



この度、アジ風の皆さんと被災地に訪問する機会を頂き、誠にありがとうございます。実際に行くのとテレビで見るのとは全く違うような感じです。被災地の様子と避難している方々の顔を見て、何とかしたいという気持ちが一層強くなってきました。

瓦礫撤去の作業に参加した時、皆さんは夜行バスの疲れと暑さをよそにして、一生懸命頑張りました。年齢、性別、国籍の違いがすっかり消えたような気がして、非常に感心し

ました。自分の力が僅かですが、被災地の復興に繋がったかと思えます。

避難所に行って、避難者の方と話し合うこともできました。避難生活が厳しいですが、皆さんのちょっと疲れた顔から、未来への希望が見られました。足が不自由にもかかわらず、見送りに来ていただいた方に、感謝の気持ちでいっぱいです。

日本は未曾有の災害に見舞われましたが、皆が力を出せば、危機は必ず乗り越えます。被災地が一日も早く復興できるよう、心より願っております。

馮苾珺（清華大→大阪大学留学）



2011年6月4、5日、私はアジ風の会員と一緒に津波の被災地の大槌町でボランティアをしました。二日間だけでしたが、私にとって掛け替えのない思い出です。アジ風の会員達とベトナムから来た留学生と一緒に、造船場で瓦礫撤去の作業をしました。現場で働いている時、元々こんなきれいな所が本当にひどい目にあったことを実感しました。作業を終えた後、近くにある廃墟のゴミの中で、

花一本がありました。これはここにいる人々と同じように負けないう心を持つ花だと思われました。翌日、避難所として使われている小学校の体育館の中に、私より何倍元気なおばあさんと交流する時、励もうとする私とその笑顔を見て、逆に励まされまして、何時の間にか、涙も出てきました。こんな自分をみると、誰が難民か、分からなくなりました。また、「日本語を勉強してよかった」と感じました。私は大槌町の復興を祈って、いつか必ずまた幸せな生活を送れると信じています。

李靖（北京師範大学大学院→大阪大学国際交流プログラム参加）



今回 アジアの新しい風によって 組織された被災地へボランティアの活動に参加するのは 忘れられない経験です。六月四日の朝、私たちは大槌町安渡小学校に到着しました。何をすればいいような気持ちで、持って 掃除した時、疲れを感じませんでした。翌日、体育館で住む 皆さんとコミュニケーションの時に、私は話す日本語が下手ですので、あまり喋りませんでしたが、小国

さんという親切なお婆さんは「交流とは、ことばだけじゃなくて、相手の心情を感じ取ることがもっとも大切だよ。」と言ってくれました。私にとって、いい勉強になりました。それに、今後は必ず日本語を勉強しつつあると思うようになりました。別れる時に、「一期一会」という日本語のことわざの意味がよく分かりました。大阪に帰った後、被災地に関する思い出は 時々頭に現れます。被災地の復旧と復興を祈って、被災地の皆さんはきっと再び幸せに生きていくことをよく信じています。